

白山ふるさと文学賞

第六回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」〉

小学生1・2年の部 最優秀賞

ははにおこつたきせき

広陽小学校二年

片川 かたかわ

翔太 しょうた

今年の五月、母がきゆうきゆう車ではこばれました。そのとき、ぼくはおとうとといえにいて、お昼をすぎても母がかえらなかつたので、すこし心ばいになりました。

ぼくとおとうとが、おなかがすいてげんかいになったころ、ともだちのお母さんとともだちが、母がきゆうきゆう車ではこばれたことをつたえにきてくれました。

そのあと、ともだちの家でしばらくテレビを見て、まっています。そのときぼくは、母は帰ってこないかもしれないと思いました。夕がたいえに帰ると、おばあちゃんがいて、母は入いんしたと聞きました。ぼくは、母のことが心ばいだつたけれど早くたいいんしてほしいな、と思いました。

つぎの日、母は帰ってきませんでした。二日目、また母は帰ってきませんでした。三日目、母は帰ってこなかつたけれどでんわがありました。母のこえをきいて心ばいだつたのがすこしおさまりました。四日目、母はまだ帰ってきませんでした。ぼくは、また少し心ばいになりました。四日たつても帰らないなんて、いっしょう帰らないのかなとんだかかなしくなりました。

ぼくは、母に早く会いたいと思いました。けれど、おとうとはぼくより小さいのに、ななずになまんしていました。それでぼくはおとうととことが力づよいと思えました。母がいなあいだ、おばあちゃんがごはんをつくってくれました。

母がたいいんしたのが、五日目でした。ぼくが学校から帰つてくると、母がいえにもどつてきていました。ぼくはそこで帰つてきてよかつたどほつとしました。そこで今までずつと心ばいして心の中になみだがながれていたけれど母が帰つてきたら母にあえたので心がスツキリかわきました。けれど母からびようきのゆくえを知らされました。

母がかかつたびようきはガンというびようきでした。ぼくは図かんでガンのことをしらべました。それによるとげんざい日本でしにいたる

びようきのトップにガンはのつていました。ぼく母はがしんでしまうかもしれないと思つて自分がバラバラになつてしまひようになりました。しかしここからきせきがおこりました。母とぼくとおとうとはじんじやに行つて

「母のガンがなおりますように。」

とおねがいました。するとしゅじゅつする前にガンでなかつたことが分かりました。ぼくたちはケンタッキーを食べておいわいしました。今回ぼくは母がびようきになつて母がいないととてもこまるし、ぼくもおとうともさびしくなることがわかりました。いつも母がいるからあんしんしてくらせています。母にはこれからいつまでも元気でいてほしいです。そのためにぼくはできることを手つだつて母をたすけようとけつしんしました。

みなさんのお母さんも、もしぼくの母みたいなことがあつた場合は、みなさんもお母さんのことをたすけてあげてください。

